

幸福原論 1999

橋爪大三郎

chapter 1 幸せの原点は遊びにある

幸せとはなんだろうか。わかっているようで、あらためて考えるとわからないものです。幸せは。

幸せには一つ特徴があって、幸せの真つ最中には気づかないものなのです。「いまが幸せの瞬間なんだ」と、リアルタイムでしみみ感じることはあまりなくて、たいていは「あのとき幸せだったなあ」と、過去を振り返る形で実感する。

そのときは夢中でわからないけれど、誰にとっても「幸せだった」と思えるのは、子供の頃です。どんな子供でも生き生きしているのは、この世の中に生まれてきて、なにもかもが珍しい、毎日が新鮮で驚きに満ちているからですね。そして、そのことを全身で受け止めて日々を生きている。だから、子供は輝いている、幸せに満ちている。

子供は遊びますね。遊びは人間の行為として大事なことなのですが、まず遊びは楽しい。楽しいから遊ぶ。楽しくない遊びとい

うのはありません。

もう一つの遊びの重要な要素は、ほかのことを忘れるということです。遊んでいるときは、家に帰ることも忘れて、宿題があることも忘れて、いま何時かっことも忘れて、本当に熱中して、遊びの中に入りこんで、自分が幸せかどうかなんてことも忘れて。子供に限らず幸せの絶頂にいるときは、幸せかどうかなんてことは考えず、自分が幸せだっことにさえ気がつかないでしょう。遊びというのは自己目的的活動だから、なぜ遊ぶかに理由なんてないし、それ自体で完結している。そうした遊び、子供の遊びが、幸せの原型だと私は思うんです。

人間は誰でも子供時代を持っています。人間は遊びながら大きくなってきた。だから、誰でも遊ぶということを知っているし、それがどんなことかもからだだわかっている。ああいう楽しいことをまたしたいなと、思わない人はおそらくいないと思います。ところが人間は、残念なことに大人になってしまふんです。大人になって遊ばなくなる。というより、遊べなくなる。もちろん大人も遊びますが、もう子供のように遊べません。大人になって何が変わるかというと、行動の形が変化するんです。

す。目的と手段がはっきり分化して、同じ狩りをするのでも、狩りをして楽しむというのではなく、食糧を手に入れなくてはいけないから狩りに行こう、ということになる。これは子供の遊びの狩りと違って本気ですから、獲物がなければ意味がない。あるいは、農作物を収穫するために種を蒔こう、ということなら、半年がかりの大変なプロジェクトだし、土地を切り開いて田圃や畑を作ろうとすれば何年もかかるわけで、成果を手にするまで、長くて険しい道程が待っていることになる。しかも、これらは目的を達するための手段ですから、楽しいとは限りませんね。

こんなふうには、やりたくなくてもやらなくてはいけないのが、仕事と呼ばれるものの実態です。しかも、仕事や労働は、もしその目的を達することができなかつたら、ムダなただ働きということになってしまふ。給料をもらって家族を養うために、嫌なのを我慢してサラリーマンをやっている、往々にしてこうした苦役のような状態になってしまふんですね。

それでは、大人はもう遊ぶことができないのでしょうか。子供のように遊び、子供の頃の全能感を取り戻す方法を、昔は祭りと呼びました。祭りのときは、労働してはいけない。普段しなくてはいけない労働が、ここでは逆に禁止されるわけです。そして、ほかのことをすべて忘れて、共同体全体で楽しいことに没頭する。いまでも祭りはありますが、昔のように全員が子供のように遊べる、という特別な時間ではなくなりました。共同体や地域社会が力を失った現代では、こうしたやり方は通用しない。遊ぶためには、一人ひとりでやるしかない。だから、一人でやる祝祭、つまりギャンブル、賭博、セックスの火遊び、そういうものが、いまの大人の遊びの中心になっている。

ただ、共同体の祭りにしろ、個人的な祝祭にしろ、こうしたものには長続きしないという特徴があります。残念なことに、すぐ

最大多数の最大幸福は、道徳および立法の根本である。——ベンサム

終わってしまう。大人が遊びを長続きさせる唯一の方法は、遊ぶように仕事をする、あるいは仕事をするふりをして遊んでしまふ、というやり方ですね。つまり、仕事を遊びにしてしまえばいい。これは誰でもいつでもできるというものではありません。が、かといって、やってできないことでもない。たとえば芸術家、芸能者、職人、修練を積んだ達人、どんな道でもいけれど第一人者。達人や第一人者というのは、顔つきが立派で、なんとというか、これをやらせたらこの人しかいないという風格のようなものが滲み出ているでしょう。本人は気がついていなくても、周りの人にはうらやましい存在で、これは一つの幸せの形と言っていると思います。

そして、これは遊びと言っても、子供の遊びとは違いますね。世の中の人の役に立ちつつ、自分の生活も同時に成り立たせることができる。しかも、本人はそのことをやるために生まれてきたとしか言いようがないような存在になっている。伝統社会にはこういう仕事がたくさんあって、それを目指す人も多かった。いまの社会にもそういった仕事がないわけではなくて、それを目指すのも、幸せを手に入れる一つの方法ではあると思います。

chapter 2 子供が遊びを失ったとき

ところがいまは、幸せを目指してその道で頑張るといふやり方が、どうも崩れてきていますね。

この原因は、遊びの欠如にあると思います。以前に比べて、子供が遊ばなくなったでしょう。街を見てごらん下さい。日が暮れるのも忘れてみんな駆け回って遊んでる光景なんて、すっかり見なくなりました。そういう文化は、どこかで途切れ、廃れてしまっ

たんです。これはテレビのせい、そして自動車のせいだと思いがすが、それだけではない、教育熱のせいでもあるかもしれません。とにかく世の中が変わって、子供が十分に遊ばなくなりました。子供はテレビを始めとしたさまざまな情報を詰めこまれ、情報に振り回され、核家族によりバラバラにされて、マンションや一戸建ての住宅の個室に閉じこめられている。

子供が遊ばなくなった、ということでは何が起きているかという点、子供の大人化です。子供はあくまで子供であって、遊ばなくてはいけないものなのに、あまりにも早く大人になってしまいうために、幸せがなにかという原点を見失ってしまふ。これは子供にとっても不幸なことだし、その子供が本当に大人になったとき、幸せというものを十分にイメージできなくなる。そして、そこで起きてくるのが、大人の子供化です。

さつきも言ったように、子供は誰でも幸せです。でも、子供はいつまでも子供のままではいられないから、どこかで断念して、もう自分は子供でないと、はっきり認識しなくてはならないときがやってくる。そのときは、奈落の底に突き落とされたような絶望を味わうけれど、でも、そのことで別の生き物に生まれ変われるんです。この先どうしようかと真剣に考えて、新しい幸せを日指し、新しい人生を自分の力で歩み始める。

ところが、子供が子供のくせに中途半端に大人気分で、「大きくなったら開業医になるんだ」とか、「やっぱり東大法学部だ」なんて言ってるようでは困るんです。「電車の運転手になりたい」とか「宇宙飛行士になって宇宙に行くんだ」とか言っているほうが未来がある。なぜかという点、大人化した子供は実際に大人になっても子供時代との断絶がない。子供から大人にジャンプできなくて、子供のまま子供化した大人になっていく。いま世の中にたくさんいるのは、こうした子供大人です。

こういう大人は、堪え性がなくて、仕事に徹してその道の修練を積むという発想がない。遊びの特徴の一つだった、ほかのことを忘れて集中するという、その集中力がないんですね。情報に左右され、親に左右されて、手段としての仕事の中にずっと居続けることができない。その外側にすぐ出てしまおうとする。行動が断片化していて、自分の行動を組織化することができないんです。

しかも、仕事そのものの変化がそうした状況をさらに加速させている、という面もありますね。昔は知的労働のホワイトカラーと肉体労働のブルーカラーの二つのタイプの仕事があつて、マルクスも言ったように、ブルーカラーは断片化した単純労働であり、ホワイトカラーは統合された複雑労働のはずだった。

ところが、最近ではブルーカラーの仕事の大部分を機械が代行するようになり、ほとんどの仕事はホワイトカラー的な仕事になっていく。しかも、統合されていたはずのホワイトカラーの仕事の断片化が進んで、知的能力がなくても誰でもできるような仕事が多くなり、ホワイトカラーのプロレタリアが、あらゆる職場で大量にあふれることになったんです。ホワイトカラーの職がほとんど地盤沈下を起こして、いまや彼らから仕事全体を見通す感覚は失われてしまっているでしょう。そうすると、仕事はやらなければならぬからやっている、というだけのもの、一体何のためにやっているのかはよくわからない。これがいまの一般的な労働者の心の風景なのではないでしょうか。

そうすると、仕事場は、できれば逃げ出したい場所ではなくなる。その気持ちも紛らわすために、外でいろいろなことをするけれど、次の日にはまた仕事場に舞い戻らなくてはならない。毎日はその空しい繰り返しになっていく。

そういう人たちの特徴は、指示待ちということ。自分の仕事を自分で組織できないから、言われるまで何もしない。遊ぶに

しても、集中力がないから一人遊びができない。チームワークの能力もないから集団遊びもできない。その結果、一人でもいられず集団の遊びもできないので、大勢でなんとなく群れているという状態になるんですが、群れていても何をやるわけでもない。ただ群れていて、解散しても群れていたいものだから、お互いに連絡を取り合つて、同じ群れだということを確認し合うことになる。

女子高生に共通する外見的特徴、茶髪だとカルズソックスだとかいうものの一つの役割は、同じ群れであることの証明ですね。そして、プリクラを一緒に撮り、ポケベルや携帯電話を持つのは、自分たちが連絡を取り合っていることの証明。ある群れに属していることを示さなくてはならないという、一種の強迫観念が彼女たちを縛っていて、これらは、まさに遊ばないまま大きくなった子供の特徴だと思います。彼らが労働者になれば指示待ち人間になり、親になればとんちんかんな教育をして、同じように大人になれない大人を作り出していくことになるでしょう。

それでも彼らはそれなりに充足しているのかというと、けつしてそんなことはないんです。こうした状態は、本人たちを苛立たせる。だって、何が幸せなのか、自分でイメージできないんですからね。もちろんテレビドラマやいろいろな情報の中には、絵に描いたような幸せや、幸せとされるものがあふれています。ブランド品に社会的ステータス、いろいろありますが、ただ、情報には必ず裏情報というものがついて回ります。あれほど立派でステータスのあった人が、実はハチャメチャな私生活を送っているよとか、憧れのスタイルを持っていたスターが、実は拒食症で死んでしまったとか。どんなに幸せな情報にも裏情報があり、素直には信じられないような構造になっていて、じゃあ、一体何が幸せなんだろうかと、途方にくれているのが現実だと思います。すると、普通に得られる情報の外側に、自分を幸せにしてくれ

る本当のなにかがあるはずだと、信じたい気持ちが起こってくる。これが、いま非常に多くの人たちに見られる現象ですね。彼らは焦っていて、現在の自分と切り離されたどこかまったく別な場所に、幸せがあると考える。そうすると、その幸せを求めて、現在の自分からジャンプしないと行かない。人格改造セミナーにしろ海外留学にしろ、いま人びとをとらえている幸せのイメージには、現在いる場所からジャンプする点に特徴があるんです。この情報化時代、幸せは現在からの連続性の中で着実に築けるものだと、なかなかイメージできなくなっているんですね。

chapter 3 リアリズムと理想を育てよう

この状況をなんとかするには、どうしたらいいのか。まず、「私は明日にもOLを辞めてイギリスに留学しよう」などとあっさり考えないでほしいですね。別に留学がいけないと言っているわけではない、それがそのまま自分を幸せにするなかであると思えるのは、根拠がないと言っているんです。

ここで大事なことは二つあって、一番目はリアリズムだと思えます。フロイトに従って現実原則と言い換えてもいいけれど、大人になると目的と手段が分離する。手段として行う活動は面白さの感じにくいものかもしれないけれど、でも、それをやらなければ生きていけない以上、現実と遊離して幸せになれるはずもない。幸せというのは、あくまで現実の中に根拠を持っていない。は成り立たないもの、それが生きていくということなんです。だから、まず現実には向かい合つて、リアリズムに立脚すべきでしょう。世の中に仕事と言われるものがあるのは、それはその仕事が必要とされているからだという現実を目覚める

幸福論 1999-102

こと。自分が日常やっていることの意味をよく考えること。これはどんな職業にも言えることですが、仕事というのは大勢のひとりが共同で生きていくための方法論なんです。あなたは自分の持ち場を守って誰かのために仕事をしてくれただけだと思っているかもしれないけれど、ちょっと想像力を働かせてみれば、ほかの大勢の人たちがあなたのために仕事をしていることがわかる。そのことに、あなたの想像力は十分働いていないのではないだろうか。

たとえば駅に行けば、時間通りに電車がやってくる。でも、これは実は当たり前なことでもなんでもなくて、誰かが眠くても毎日同じ時間に起きて、駅の改札を通れるようにしたり、電車を運転したり、信号を整備したりして、そうした多くのひとりの努力によって、世の中の電車は時間通りに動いている。そのことから、あなたはそれらの利益を受け取り、そのお返しにあなたはあなたの仕事をしているわけで、もしみんなが仕事をやめてしまったら、世の中は大混乱になって、あなたはどこかに行くことも、明日のパンを手に入れることも難しくなるはずだ。

みんなが仕事を分担し合っているのは、実は人間の知恵の結晶であり、仕事は生きるためのネットワークなんです。仕事の支え合いの構造、助け合いの構造と言ってもいいけれど、そういう構造をまず見つめるべきですね。仕事の意味とは、自分のためだけのものではなく、むしろ、ほかの人の役に立つという点にある。それが見えなければ、自分が仕事をしている意味が本当にはわからない。そして、それがわかった上で、自分が仕事をしているオフィスの壁の向こう側、自分が洗濯や掃除をしているマンションの壁の向こう側にどういう世界が広がっているか、自分の日々の単調な繰り返し向こう側にある世界について、なるべくありありとしたイメージなり実感なりを持つべきだと思います。

そのために役に立つのは、子供から大人に移り変わる若い時期

係がカギになると思います。仕事をしていればそこでも人とのつながりはできてくる。生きていく上ではどうしても担わなくてはならない役割分担ができてくるのですが、そこをちょっと離れて、自由な個人となって別な個人と出会う場所を持つことは、自分を見失わないための大きな役割を果たしてくれるはずです。

このことにはみんな気がついていて、たとえば友だちと週末にカラオケに行ったり、スキーのツアーに参加したり、なんだかんだとやっています。ただ、単なるレジャーや気晴らしを超えて、本当の意味であるべき私、あるべき世の中、そして幸せのあり方を模索していくためには、同じ人との出会いであっても、もう少し違うものが必要になってくるように思います。

公（パブリック）とは、言い替えば自分の仕事を支えている枠組みという意味でもあると思いますが、たとえば主婦が家事をこなし、OLが会社の仕事をしていけば生きていける、その役割分担や経済の仕組みは、一体誰が作ったのか。自分は誰かが決めた枠の中にすっぽり収まっただけかもしれないけれど、でもその枠を決める場があって、それはやはりこの社会に生きる人間全体であるはずでしょう。だとしたら、その中のメンバーの一人として、自分はその場に出ていくことができるのではないだろうか。そして、その場を、普通は公と言います。この公の目を持って、自分のプライベートな生活を見つめ直す。これが、いま言った理想という意味でもあるんですね。

公は、ほかにもいろいろな名前がついています。まず、政治。私たちは一人ひとりの国民として、有権者として投票することができます。その投票はなんのためですか？ 国会議員を選ぶためです。国会議員は何をしますか？ 法律を作ります。法律は何の役に立ちますか？ それで政府の行動の方法が決まり、世の中の仕組みが決まります。そして、その結果、人びとがどうやって生き

に、どういう体験をしたかでしょう。なるべくなら、将来なるであろう職業と関係ないことをしておくことが大事だと思います。たとえば日本にずっといるであろう農家の跡取りだったら、若いときに外国を見ておく。デスクワークをするであろう人だったら、なるべくからだを動かすアルバイトをやっておく。将来管理職になるだろう人は、なるべく一線でこき使われておけば、やって多くのものを見て、感じて、自分の世界を広げておけば、あとあとある仕事だけをするようになったとしても、より耐えやすく、より仕事の意味がわかりやすい。その道に精進しやすいと思えます。

そして、その上で、単純で単調な繰り返しの中にあっても、より進歩していくという向上心を忘れないこと。これは野心を持っていまの職業から別の職業にのし上がっていくというような、大きな向上心でもいいし、今日は十五分でできた掃除を明日は十三分でやってみようというようなささやかな向上心でもいい。単調な繰り返しを耐えさせてくれるのは、この向上心なんです。

そして、仕事という面でもより人に必要とされたい、仕事での充実感を追求していきたいと思うなら、人のやりたがらないことをやるというのも、一つの行き方だと思います。みんながやりたがらないことをやるのが人の常ですが、そこを逆手にとって、人がやりたがらないことをやる。これがプロフェッショナルとして成功する一つの方法であり、それを恐れないことも一つの勇気だと、私は考えるんですね。

リアリズムに立脚して自分の生活を踏まえつつ、どんなささやかな労働の中にも、現実世界のその先にある、あるべき姿をいつも心に思い描いていること。それを仮に理想と呼ぶならば、その理想を見失わないことも大事なことです。

そして、理想を追求するのには、個人の夢想ではなく、人間関

ていくかが決まります。つまり、私たちは、自分のことを自分で決めていくわけですね。

それなのに、決められた枠の中で自分が単に生きていくだけだとしたら、それは人生の半分しか見ていないことになるでしょう。どんなふう生きていくのか、自分で決めているのだという構造がわかったならば、見通しがよくなるし、生きやすくなるし、もし生きにくい点があれば、それを変えることだってできるだろう。それがどれだけ素晴らしいことなのかをわかることは、奴隷が主人になるくらい、違いがある。公の視点を持つのは、そのくらいとても大事なことです。

別な国では、これに宗教と名づけているところもあります。宗教もまた、人びとがどう行動したらいいかという枠組みですからね。宗教というと、日本人は何を信じたらいいかという約束だと思いがちですが、そうではない。宗教の一番大事な役割は、人がどう行動したらいいかの枠組みを与えることです。それは、宗教では神様が決めたということになっていますが、みんなが決めたと考えれば、構造は政治とよく似ていて、宗教もまた公の場所ということになる。そういう場所に出ていって、この世のあるべき姿について話し合う。それが宗教の大事な役割なんです。

そして、もう一つは地域社会、あるいは教育と言ってもいいかもしれません。世の中には子供のいない人がいるし、自分の子供を育て終ったご老人もいるかもしれない。でも、近所の子供がおかしなことをしたら怒ったり叱ったりするのは、大人一般として、次の世代を育てる任務があるからでしょう。こういう視点を持つことが地域社会の意味であり、教育ということなんです。子供がいる人でも、こうした視点を持つことで、自分の子供と直接的に関わるだけでなく、間接的にも関わる事ができるようになる。子育てをちょっと突き放して見ることが可能になる。そのた

めにも、地域社会という地域のつながりが大事なんですね。

そのほかにも、ボランティアとか環境保護とか、いろいろな世の中のための活動というのがあります。自分に与えられた時間と能力を使って、自分が必ずしもやらなければいけないことではないけれど、自分がやったほうがいいと思うもの、これを大勢の人と協力してやってみよう。

以上の四つは、ギャンブルとかカラオケとか河原でバーベキューパーティとか、そういうこととは違う、公のことなんです。そうした活動を通して、自分の生き方を人びとと協力して外側から枠組みとして支え、作り直していく。これは目的と手段がバラバラになっている、いまの仕事の困った状況を埋め合わせるための、大きな手助けとなるはずのものです。

日本人の場合、公の領域が小さいから、幸せになるといって、個人芸、個人のフィリングの問題になつてしまふ傾向があるけれど、もしこうしたことを何もしなかったらどうなるか。文句を言いながら仕事をし、家事をし、そして一番大事なこの枠組みについては官僚任せ、他人任せの半人前人間になるだけです。他人に自分の運命を委ねたまま、自分がなぜ幸せになれないのかをエンエン考えていても、それは自立した人間のすることではありませんか。自分で自分が幸せになるように世の中を作り替えるための努力をする。それが人間が自分の人生に責任を持つということなんです。

chapter 4 人は誰でも幸せになれる

人は幸せになれるかと言えば、なれるに決まっていると私は思います。幸せになるための絶対条件、必要十分条件なんかどこに

るような気がしません。

じゃあ、具体的には何をしたらいいのか。思いつくまま挙げてみましょう。まず、くだらないテレビを見るな。子供をけなすな。いまの親は、子どもを叱るかわりにけなしている。ごはんはよく噛んで食べる。まっすぐうちに帰らないでちよつと寄り道をせよ。エレベーターは使わずに、階段は歩いて上れ。一日になにか一つ自分のためのことをせよ。これらは、みんなものたえです。読者はそれぞれに、何を言っているのかよく考えてもらいたい。考えた上で『あなたが幸せになるための108のレシ』のような本が書けるなら、みんなアイデアを出すのもいい。日本人はよく「人に迷惑をかけるな」と言いますが、人に迷惑をかけるで生きることもなくてできない相談なんだから、そんな言い方はしないほうがいいと、私は言いたいですね。それより「人に迷惑をかけてもいいが、自分に迷惑をかける自分」と「迷惑をかける自分」が生まれるでしょう。このときの、「迷惑をかける自分」が、おそらく幸せになるべき主体なんです。いまままで自分はいろんな言い訳をしながら、自分に迷惑をかけるつけてきたのではないだろうか。

二十一世紀がどうなるかは、われわれがいかにこの社会を立て直せるかにかかっていると思います。よく「ちよつと幸せ」なんて言い方がありますが、幸福と幸福感とはまったく違うものです。幸福感がないから私は幸福じゃないと考えたり、幸福感がななくちゃいけないんじゃないかと思つてなにかやってみたりするのは、実は幸福とはなんの関係もない、ただのノイローゼですね。幸福とは自分の生き方のスタイルの完成度のことですから、自分のフィリングではない。幸福がフィリングだと思つてしまうのは、公の世界が薄弱になり、自分の行動のスタイルが曖昧に

もなく、それは本人の考え次第であり、場合によりけりであり、つまり、どんな人でもどんなときでも幸せにはなりうるんです。大切な身内を亡くしたり、病気に打ちひしがれたり、厳しい状況は誰にでも必ずやつてくるけれど、にもかかわらず、誰でも幸せになれると私は思う。

それがなぜかと言えば、生きていること、それ自体が幸せだからです。幸せとは生きていることをどう意味づけるかという問題で、自分の生きていることの意味がはっきりわかれば、どんな人でも自分の生き方を納得し、自分の生き方に自信を持ち、自分の生き方に誇りを持つことはできるはずでしょう。だとしたら、人は誰でも幸せになれるはずなんです。人間であることが、とりもなおさずこの世の中で最高に幸せなあり方なんです。

いくら資本主義社会は素晴らしいとか、科学技術は素晴らしいと言つても、人間を作り出すことはできない。そんなかけがえない存在があなたであるという事実をまず噛みしめるべきですね。そういう素晴らしい、この世に唯一の存在として生まれてしまったあなたがどうすればいいかという、これはなにかの運命なのだと思つて、その運命をまっとうする。自分にできることはすべてやり、それもなるべくよくやり、ほかの人たちとなるべくよい関係を持つ。それが幸せでなくてなんだろうか。

この地球上には六十億の人がいますが、その誰もが幸せになりたいと願っている。たとえ争いがあつても、争いを乗り越えて幸せになりたがっているという点では一致しているはずでしょう。六十億の人が幸せになろうとごめいている。そういう状態をありありと実感できること、そうした感受性を持つことが、自分を大切にし、幸せになるための出発点だと私は思います。幸せになるための絶対的な方程式はないけれど、幸せになった人の感じを想像すると、なにか自分にこだわらない広がりというのがあ

なっているというところで、幸福からは逆に遠ざかっているんです。

いまのように幸福を求める人が増え、幸福感というものがあるかのように思い、個人生活に閉じこもつて自分の幸福だけを追求しようという感覚になつていっているのは、それだけ公の世界が衰弱している証拠です。公の世界が衰弱し、経済だけが成長するというのは、戦後日本を通じての悪癖だった。それがいまや曲がり角にきているのは、公の社会を立て直して、社会のバランスを回復せよということでもあるんです。だから、そうした方向に進み出すことができれば、二十一世紀はいまよりよくなるでしょう。でも、それに失敗すれば、いまの状態がさらに悪化する。これは単に予測すればいい問題ではなく、要はわれわれがどう行動するかという問題なんです。ここで必要なのは、決意と行動なんです。

教育も大事です。子供は大人にならなくてはいいけない以上、大人になつたときに人間として困らないような準備をきちんとさせておく。これが教育というものです。その本質においては、幸せになるための方法でなければなりません。いまのように教育が衰弱している中では、教育を受ければ受けるほど幸せになりにくくなるでしょう。そこで公の立場から、大人たちが手を携えて、教育改革をしなければならぬんです。

そして、その根本は、子供に幸せになるための技術を身につけさせること。幸せとはなにかを知識として知るのではなく、からだで感じとること。そのためには十分に遊ばせ、遊んだあとには学問の意義に対する敬意を身につけ、職業を選びとつて、自分で生きていくための能力と覚悟を身につける。こうした段取りを踏んで大人になる子供たちを支援するのが大人の役割ですが、いまはそれがまったくできていません。大人ももう一度覚悟を決めてそれをやるのが、これまでの過去の過ちを次の世代で繰り返さないために、重要なことだと思います。

(社会学者)